運鈍根感――子供の興味を科学する――

京都大学医学研究科　　鍋島陽一

２００７年度の武田医学賞を受賞することとなった。これまで１００人の先達がこの賞を受賞されており、その記念に「武田医学賞１００人の横顔」と題する本が編集、出版され、「若き研究者に贈る言葉」が語られている。日本の生命科学、医学を牽引されてこられた方々の珠玉の言葉にあふれている。この本を手にして改めて今回の受賞を大変光栄に思った次第である。私は長らく過去を振り返ることなく研究を続けてきた。また、現役で研究を続けている私にとっては、研究のあり方、科学者のあり方をまとめて発表することなど思いもよらず、面映い思いを禁じえない。そこで、ともかく心に思い浮かんだことを書き留めることでその責を果たすこととした。

私は戦後の貧しい時代に生まれ、幼少期を過ごした。次いで東京オリンピックの感動やケネディー暗殺の第一報を日米同時テレビ中継で見るなど、躍動感が感じられる時代がやってきた。科学の世界も興奮に満ちた時代であった。DNA の二重螺旋の発見をはじめ、次々と目を見張る事実が発見され、セントラルドグマが確かな形をもって浮かび上がった。私は６６年に医学部に入学し、暫くして生物学の隆盛を目の当たりにした。引き続く生命科学の爆発的な発展を予感させるに十分な興奮が伝わってきた。このような中で私は臨床医への道を自ら閉ざした。経験に根ざした医学から真に生物学に根ざした医学への転換が表向きの理由である。生物学の虜になり、何をやるか？「生物学の基本命題は何か」と考えた。これが今でも私の原点となっている。以来、自分自身の研究を「科学の歴史に位置づける」こと、また、「基本

命題の解明にどのように貢献するか」を意識して研究を進めることに心を配ってきたつもりである。その顛末については問わないで頂きたい。

ヒトゲノムの解読やその後の網羅的解析手段の発達により、生命科学は新たな展開を見せている。また、生物を新たな視点で捉えなおさなければと思わせる事実が幾つも見出されている。即ち、生命科学は歴史の転換点を迎えている。いつの時代も歴史の転換点に立ち会うことは幸運である。この幸運をどのように受け止めるか、そして何を面白いと考えるか、自らの感性に賭けてみるに相応しい時代の転換点に立っていることだけは意識しようではないか。この時代の第二の特徴は研究の進歩が著しく速く見え、膨大な情報が溢れていることである。それに、「評価、公開」「任期制」が合言葉となって追いかけてくる。よって、この時代に生きる研究者が、次々と新しい情報を取り入れ、巧みに論文をまとめ、研究費を獲得しなければとの思いに駆られても不思議ではない。確かに追い立てられるような切迫感、不安感を感じる時代である。問題は、この忙しない「時代の要求」とどう折り合いをつけるかである。しかし、冷静に考えてみれば、膨大な情報は味方であり、面白い題材、重要な課題は沢山ある。また、日々の実験の中で面白い現象にぶつかることは稀ではない。おそらく、自分の好奇心に基づいて基本的な課題の解明を目指して着実に研究を進めていけば、科学の歴史に一行、あるいは一ページ、時には一章を付け加える可能性が開けてくるのではないだろうか。何かを残すことは簡単な事ではないが、研究の女神は楽観主義者に微笑みかけてくれると信じたい。

さて、学生時代に「生物の統一性の上に築かれた生物の多様性の解明」を目指すことを決心したものの決心だけでは研究はできない。具体的なテーマを決めなければならない。対象とする現象、分子、生

物種、そしてどのような手段でやるか、どこから切り込んでいくか、「子供の興味」を「科学者の興味」、「研究者の実験計画」に具体的に転換しなければならない。ここが難しいところである。「正しい質問と綿密な計画」が成功の鍵である。それにしても子供は何時もどうして？と迫ってくる。「自分は何を知りたいのか？」自問自答の繰り返しが研究者の日常である。どうやら研究とは「子供の不思議を科学する」ことらしい。子供は欲しいものがあればその場で地団太を踏む。「思いついたら即始めよ」である。

私の見るところでは、最近の若い研究者、学生はもう少し「大人」であるように思える。そして、何がやりたいのかと問うと、神経がやりたい、再生医学がやりたいと。しかし、具体的なことに話が進むとそれほどのパッションを感じないことが多い。一方で、学位をとること、ポストを得ること、研究費を取ることについては結構熱心であり、計算している。いわば「大人の興味をもった子供」のようである。これで科学することを楽しめるのだろうか。このような中で、いい学生がほしいとぼやく教授は実に多い。一方で、良い教授に出会いたいとぼやいている学生が多いことも肝に銘じなければならない。ぼやいていることについては、私も例外ではない。とはいえ、私は良い仲間に恵まれたと感謝している。誰とどのような環境（雰囲気）で研究をするか、とても大事なことである。振り返ってみると節目ふしめで「良い人との出会い」があった。人との出会いは新しい技術やアイデアをもたらしてくれる。私の研究は出会った人達に彩られている。

さて、本稿を閉じるにあたってひと言、若き研究者に贈る言葉を述べなければならない。科学者はいつも運鈍根感である。即ち、愚鈍に、時には感性鋭く、常に根気よく、そして、心の準備のあるところに時折舞い降りる幸運（セレンディピティー）を味方につけてである。幸いなことに何があっても確かなことが一つある。In Science, Truth always wins. (Max Perutz)である。

運鈍根感

愚鈍に、

時には感性鋭く、

常に根気よく、

そして、

心の準備のあるところに時折舞い降りる幸運を味方につけてである。